

報 告



情報サービス大会報告 — 実行委員を経験して —

林 伴子

I. はじめに

第20回情報サービス研究大会は、2003年7月12-13日、京都に於いて開催された。

今大会は実行委員長に京都府立医科大学附属図書館事務長の宮本小夜子氏が就任し、同図書館のスタッフが実行委員の中心となって編成された。近畿病院図書室協議会からは、事務局長に京都南病院の山室さん、委員として松阪中央総合病院の森川さん、そして私の3名が参加した。また国立京都病院の小田中さんも協力委員として加わった。

長い間近病図協の研修会に携わっているが、今回の情報サービス研究大会開催までの経緯は協議会活動とは一味違い、私にとって貴重な経験となった。この度機会を与えていただいたので、第1回実行委員会の開催から大会開催にいたるまでを報告する。

II. 実行委員会の実施状況

1. 第1回実行委員会

日時：2002年5月11日（土）10：00～

場所：京都府立医科大学附属図書館（以下実行委員会の開催場所は同じ）

委員の大半が大会参加の経験回数が少なく、静岡大会のさらに前であったので、とりあえず日程の調整と大まかな役割分担についての検討から始めた。

今回は20回の記念大会なので、テーマは特に決めず、特別講演の他に、記念講演を山崎茂明

代表幹事に依頼することなどを決めた。

また、大きな大会を運営するためには実行委員の数の不足が指摘され、次回までに委員の増員を図ることになった。

2. 第2回実行委員会

日時：2002年8月24日（土）10：00～

今大会の実行委員長は、当初京都府立医科大学附属図書館前事務局長田中新二氏が委嘱されていたが、田中氏退職に伴って実行委員長を選出する必要がでてきた。府立医大での開催が第1回の実行委員会で決定していたこと、作業の大半を府立医大図書館スタッフにどうしても依存せざるをえないことなどから、宮本小夜子氏へお願いすることになった。また宮本氏をサポートするために、大会経験の豊富な京都南病院の山室さんが事務局長に就任することになった。

第1回の実行委員会で指摘があった委員の増員は、JMLA、看護大学図書館、薬学図書館からの参加を得ることができ、多種の図書館員からなる委員会が始動することになり、プログラム委員をはじめ、会計等、役割分担が決められた。

実行委員のうち数名は静岡大会に参加し、私も参加したのであるが、今大会の運営について具体的なイメージがなかなかつかめずにいた。しかし、基本的内容の協議が始まり、大会までのタイムスケジュールが提示されるなど、徐々に形が整えられてゆくにつれ、実感を伴うものになってきた。

3. 第3回実行委員会

日時：2002年11月9日（土）16：00～

日程・会場・懇親会などが決定したので、参加者への広報を早急に行うことになった。すでにホームページは立ち上げてあったが、第一報を発送すること、関係雑誌に大会開催案内を掲載してもらうことになった。

プログラムについてはプログラム委員会での検討結果が報告され、演題募集の作業日程が決まった。また当日の時間割の試案が提示され、細部の検討を行った。

4. 第4回実行委員会

日時：2003年3月15日（土）15：00～

第一報は1月に発送し、演題募集も開始した。また継続教育の演題・講師の決定も終わり、シンポジウムの詳細も決まったとの報告があった。

一般演題・ポスターセッションの受付状況をもとに、プログラムについて協議が行われた。

第二報（参加申込用）の発送はプログラムができ次第行うことになった。

当日の会場の割り振りが府立医大から提示され、企業展示も具体化してきた。

今大会は記念大会であることから、記念グッズの作成が当初から検討課題となっていた。予算等を考慮して何がふさわしいか検討してきたが、特別補助が付くことになったので候補を絞りこむことにした。

5. 第5回実行委員会

日時：2003年6月14日（土）13：00～

いよいよ大会直前の委員会開催となった。

当日の役割分担を細かく決定し、タイムテーブル案に従って作業を確認し、最終的な調整を行った。また、実際に会場の下見を行った。当日までの作業としては、抄録集の作成がまだ残っており、集合写真の申し込み等、細かなことでの打ち合わせも必要であった。

Ⅲ. 作業内容

第2回実行委員会の開催後、メーリングリストを立ち上げ、プログラム等の検討はメールを通して行うことになった。

1. プログラム

プログラム委員会ではメールを駆使して、大会の構成をはじめ、演題の選定、継続教育の検討と講師の依頼など、一番の重責を担う活動を行うことになった。

実行委員会での議題にもあがったが、20回の記念大会ということで、記念講演を当初からの山崎代表幹事に依頼することにした。また、新たな企画としてシンポジウムを開催することにした。

今大会でのプログラム上での大きな変更点のもうひとつが昼食時のラウンドテーブルの取り扱いである。

ラウンドテーブルはこれまでの大会のほとんどで行われてきたが、いささか新鮮味に欠けたこと、スケジュールが時間的制約を受けやすいことなどから、今大会では見合わせることにした。その代わり、時間的にゆとりをもたせてポスターセッションなどの充実を図ることにした。

モーニングセッションの実施についても、いろいろ意見が出されたが、希望があれば開催のための場所提供等、最低限の準備はするが、実際の運営には実行委員は関与しないという方針が決定された。

こうした大きな方針の決定以外にも、一般演題の区分、ポスターセッションのやり方、時間配分等、検討課題は山積みで、連日メールが飛び交うことになった。プログラム委員以外にも送られてくるため、議論に加わることはもちろん可能であったが、目を通すだけでも大変で、私の場合は意見を出すまでにはいたらなかった。委員の方々の努力には敬意を表する次第である。

プログラム委員会は上記メールでの検討以外

にも、実行委員会開催日や独自の日程で開かれた。第1回プログラム委員会は第3回実行委員会に先立って行われ、継続教育、指定課題、シンポジウムの内容と一般演題の募集方法などについての検討が行われた。第2回プログラム委員会は2003年1月5日という年始の開催となったため、参加者が少なかったが、継続教育のテーマと講師の選定を中心に行なわれた。また、開催案内の第一報の発送について、演題提出方法、記念グッズなどについても検討された。

2. 広報

参加の呼びかけには今までの大会同様、過去の参加者へ案内発送を行うことにした。第一報は、交通、宿泊の確保のためにもできるだけ早く情報がほしいという参加予定者からの声を考慮して、日程・会場を知らせる内容をハガキで送ることにした。第二報はプログラム決定後に開催案内・会費振込書・会場地図などを同封して封書で送付した。発送数は最終的に830名分程になった。

それ以外に、有効な広報としてホームページを開くことになった。10月中旬から順次立ち上げて、プログラム完成に伴って、充実した内容になった。

大会を象徴するロゴの作成も小田中さんの手によって美しく仕上がった。

3. 事務局

会場の設定・整備、参加企業との折衝、備品の調達、機材の配備、懇親会の準備、昼食の手配、記念グッズの作成等々、細かな配慮を伴う事柄が多かったが、府立医大図書館のスタッフを中心とした実行委員の手によって着々と進められた。

データでのやりとり可能な申し込み受付のみ、京都以外での作業となった。受付は第二報発送後早速に入り始め、5月末までに一般参加で170名以上になった。

ラウンドテーブルを取りやめたので、入金項

目数は少なくなったが、懇親会の参加者の把握、昼食の発注などで、大会直前まで打ち合わせが必要であった。また申込締切り後にも問い合わせが十数件あったことから、名簿および名札の作成は直前に行くことになった。

宮本実行委員長、山室事務局長は、分担の枠を超えて繁雑な対応に追われることになった。

IV. 大会実施

1. 大会前日

平日の午後になるため、出席可能な実行委員のみでの作業となったが、大半の委員の参加を得た。

配布資料が大部になり、袋詰め作業に時間を要した。また記念グッズのマグカップも袋を用意したので、当日渡しやすいうように準備することにした。

名札は当初参加者各自に記名してもらうことも考えたが、氏名・所属・ロゴ入りで作成し、仕分けして受付会場におき、参加者に探してもらうことにした。昼食券を用意したので、名簿で確認しながら名札ケースと一緒にしておくことにした。

タイムテーブルの確認と同時に会場のチェックも行い、メイン会場の音声・照明チェック、サインの確認、機材のチェック、看板の設置など、最終確認を行った。

2. 大会当日

受付開始の1時間半前に集合し、準備にとりかかった。受付は当日申し込みも予想されたため、5人で対応することになった。

名札は予想以上にスムーズな流れで渡すことができた。

大会が始まってからは、実行委員はそれぞれの役割分担に従って行動することにし、判断を必要とする事案については実行委員長、事務局長に携帯電話で連絡することにし、全体の状況を両氏が把握できるようにした。そうはいつても、それぞれの場所で処理しなければならない

ことが多々あったと聞いている。

2日目は、モーニングセッションとして前回同様エディターズ・ミーティングをおこなったので、準備担当者は早朝の集合となった。

当日は雨模様のあいにくの天候となったため、ポスターセッション、プロダクトレビューの見学および昼食のための移動が大変だったと思うが、大きなトラブルもなく無事終了した。

V. 大会終了後

大会終了後、当日参加者を含めた最終の出席者数は270名であった。企業参加は15社で、レビューは10社が行った。

終了後の参加者アンケートでは72名からの回答があったが、発表内容、会場とも「よい」、「大変よい」が70%以上をしめ、おおむね好評であった。各発表についての感想では、今後の業務の参考にしたいとの声も多かった。

VI. おわりに

実行委員会の開催を中心に、7月12-13日にわたる第20回医学情報サービス京都大会の開催についての報告を行った。前回大会を挟んで、第1回の実行委員会から実際の大会開催まで、実に1年以上を要したことになる。

この大会は個人単位の自由な集まりを原則としている。そのため、実行委員も個人の資格で参加したことになる。実際には会場を提供して下さった、京都府立医科大学附属図書館の方々の存在を抜きにして、スムーズな大会運営は図れなかったであろう。しかし内容の充実という点では、立場の違う図書館員がいろいろな意見を出し合ったことはお互いの刺激となり、有効であったと考える。

アンケート結果にも、個人単位での参加をこの会の理念として高く評価する声があがってい

た。

ひとつ残念だったことをあげるならば、病院図書室からの発表が少なかったことである。もともと近畿地区の病院図書館員の参加はどちらかというと低調である。今回も京都での開催であったが、近病図協会員からの発表は1例だけであった。一人勤務の多い病院図書館員にとって、病院以外の図書館員と交流できる機会は少ない。この大会のような機会を捉えて、近病図協研修会とはまた違った雰囲気のもと、研修してもらえればと考える。

第20回医学情報サービス京都大会実行委員会

実行委員長

宮本小夜子（京都府立医科大学附属図書館）

実行委員

白木俊男（鳥取大学附属図書館）

善見尚子（関西医科大学附属図書館）

澤 典子（同上）

山下ユミ（京都府立医科大学附属図書館）

大前富美（大阪府立看護大学附属図書館）

木口敏子（神戸薬科大学図書館）

田中裕子（関西医科大学附属男山病院）

枚田真紀子（京都府立医科大学附属図書館）

田中かず子（同上）

広瀬美貴（同上）

藤本俊己（同上）

森川治美（松阪中央総合病院地域医療連携室）

林 伴子（社会保険神戸中央病院医学資料室）

事務局長

山室真知子（京都南病院図書室）

協力委員

小田中徹也（国立京都病院図書室）

田中新二（元京都府立医科大学附属図書館事務長）

斎藤真千代（京都府立医科大学附属図書館）